

かつて長篠駅から海老（えび）へ行く街道で、道連れになった男があった。いろいろ世間話をするうち、北設楽郡段嶺（だみね）村のものと知れた。そのおり聞いたことであるが、段嶺の奥の段戸山御料林中の、水晶山の木地屋部落へ入り込んだ時に、そこの有力者らしい家に、

きじや きぢ ₂ [木地屋]

轆轤(ろくろ)を使って椀や盆など、木地のままの器物を作る職人。かつては良材を求めて山から山へと渡り歩いていた。明治以降、急減。木地師。木地挽(び)き。轆轤師。

見事な鹿の頭が二つ、角づきのまま座敷に飾ってあったそうである。何とかして一つ譲ってくれぬかと、掛け合った末に、三十円まで出すと言うたが、ついに肯わなんだと言う。なんでもごく新しい木地屋部落で、最初は二、三戸であったのが、忽ち二、三〇戸に増えたと言うた。そこへ初めて木地屋が入り込んだ頃には、附近の山中に、一五、六ずつも群れになって、遊んでいる鹿を見ることは珍しくなかったそうである。段戸山の鹿は昔から有名であった。次の話も同じ山中の話である。

某の杣が山中の小屋に働いていた時のこと、一日ひどく雪が積もって、仕事が出来ぬところからぼんやり小屋の前に立っていると、向かいの日陰山に鹿が二匹遊んでいた。そこで退屈凌ぎに仲間を誘い合って、その鹿を遠巻きにして追いたてた。すると鹿は一気に峯を越して遁げてしまったので、みんなして笑いながら小屋へ引き返して来ると、途中の一叢伐り残した茂みの中に、何やらむくむく動くものがある。よくよく見るとそれが鹿の群れであった。およそ二〇ばかりもいたと言うが、尻と尻を押し合うようにして、木の陰に塊り合っていたそうである。すぐ追い散らしてしまったが、前の鹿を追った時、どうして遁げなかったか、不思議だと言うた。日露戦争の済んだ年あたりで、某は、三〇を少し出た年配であった。

また、自分の村の山口某は、山中の杣小屋へ、村から飛脚に立った時、途中の金床平（かなとこだいら）の高原で夥しい鹿を見たと言うた。途中の田峯村から日を暮らして、金床平へかかった時は、八月一五日の満月が、昼のように明るかったそうである。見渡す限り広々とした草生に掛かって、初めて鹿の群れを見た時は、びっくりしたと言う。まるで放牧の馬のように、何十と知れぬ鹿が、月の光を浴びて一面に散らかっていたそうである。人間の行くのも知らぬ気に、平気で遊んでいたのは、怖ろしくもあったが、見ものでもあった。中には道の中央に立ち塞がったり、脇から後を見送っているものもあった。

夜遅く目的の山小屋へ着いたが、そこへ行くまでの間、高原を出離れてからも、五つ六つぐらいの群れになったのには、数え切れぬほど遇ったと言うた。

明治二〇年頃で、山口某はその頃二五、六の青年であった。